エンカウンターを利用した
良好な学級集団作りの試み
―レクリェーション活動「学級自治会」をとおして―

ＨＲＨ委員会　肥沼　則明

筑波大学附属中学校「研究紀要」第54号抜刷

2002年３月

エンカウンターを利用した良好な学級集団作りの試み

ーレクリェーション活動「学級自治会」をとおしてー

ＨＲＨ委員会　肥沼　則明

１．はじめに

私たちは，社会生活を送る以上，他人との関わりを無視しては生きていけない。ところが，高度に発達した情報社会に生きる現代人は，自分を取り巻く人との関わり方が以前よりも下手になってきていると言われている。特に，幼い頃からテレビ･ゲームばかりに熱中して，他人との関わりによって初めて成り立つような遊びを経験して来なかった子供にその傾向が顕著に出ているそうである。現在問題になっている学級崩壊や児童・生徒同士の人間関係上のトラブルも，人と人との関係作りが上手にできないことが大きな原因の１つであることが指摘されている。

そのような人間関係上のトラブルを解決する手段として，「エンカウンター」と呼ばれる手法が注目され，効果を上げているという報告が増えてきた。これは，意図的に良好な人間関係を構築しなければ解決できないような課題を与えることにより，それを自分自身で解決していく過程をとおして，児童・生徒に良好な人間関係を作る技術を習得させようとするものである。本校でも，これまでに保健体育科の授業において盛んに行われてきたほか，「ホームルーム・アワー」（学活と道徳を融合させた時間。以下，ＨＲＨと省略）の授業でエンカウンターの考え方に基づいた指導が行われ，効果を上げたことが報告されている（館，1998)。

そこで，ここでは，最初に良好な集団作りとエンカウンターの関係を明らかにし，次に筆者が学級担任として，第１学年のＨＲＨ委員として行ったエンカウンター活動の実践を報告することにする。

２．「エンカウンター」の効果

(1)　人間関係づくりとエンカウンター

①　友だちづくりが苦手な子ども

最近の子どもたちが人間関係づくりが苦手になっているということは１でもふれた。ただし，ここで言う「人間関係」とは，子どもたちが日常生活において同年代の仲間と築く関係を指しているので，ここではそれを「友だちづくり」と言い替えることにする。

さて，子どもたちが友だちづくりが苦手になった理由を，榎本（2000）は次の４点にまとめている。

ア　遊ぶ時間や空間が少ないことからくる，遊び体験の乏しさ

イ　同級生との遊びが中心であることによる，異年齢集団での中での遊びの不足

ウ　移動社会の進展による，地域社会の人間関係，近隣関係の希薄化

エ　欧米文化の影響による，人と人とが切り離される孤立化の傾向

上記の分析を見ても明らかであるが，友達づくりの能力というものは子どもたちがもともと持っていたものが自然に開花するということではなく，社会生活を送る中で他との関わりをとおして身につけていくものであることがわかる。それはつまり，もし目の前の子どもたちが上記のよ

うな理由で良い友だち関係をつくる技能（これは「ソーシャル・スキル」の大切な一部と言える）を身につけずに成長してしまっているのだとすれば，どこかでそれを身につける場を意図的に設定する必要があるということを示唆しているわけである。

②　良い友だち関係づくり

では，良い友だち関係とは，どのような状態にあることをさすのであろうか。この点について押谷（2000）は次のような３点を挙げている。

ア　互いを認めあうこと

イ　信頼しあうこと

ウ　励ましあい，高めあうこと

そして，このような状態を集団内において築くためには，心がふれあう，響き合う友だち関係を育てることが大切であると強調しており，それを実現するための具体的方策として次のようなことが求められるとしている。

ア　野外活動を活発化する

イ　さまざまな人々と交わる

ウ　「思いっきり体験」をする

エ　鍛えあい，高めあう体験をする

しかし，①でもふれたように，最近の子どもたちは日常生活の中で上記のようなことをあまり経験してきていない。それゆえ，新たに「学級」という集団を組織したときにも，子どもたちだけで自然に良い友だち関係を作り上げるのが難しくなっている。そこで，学校生活の中でこのような経験をさせる機会を計画的に設定することで，互いに認めあい，信頼しあい，励まし高めあうような人間関係作りを押し進める必要があるのである。

(2)　本校の修学旅行におけるエンカウンター

平成10年度の修学旅行の１コースとして筆者が担当した「野外生活体験コース」では，近隣にある施設で運営される「プロジェクト・アドベンチャー」（以下，ＰＡ）というプログラムを取り入れた。主な内容は，フィールド・アスレチックのような屋外施設の中で，一見すると不可能に見えるような課題に対して，仲間と相談しながら試行錯誤を繰り返す中で課題を達成させる喜びを共有させるというものである。ＰＡを企画しているプロジェクト・アドベンチャー・ジャパンによると，これはもともと米国で犯罪者の正常な社会復帰を促進するために開発されたもので，犯罪者の多くは集団において自分を上手に生かすことができないがために犯罪を犯す傾向があるという犯罪心理学の考え方に基づいているそうである。すなわち，本プログラムはまさにエンカウンターの考え方によって，集団における個人の人間関係作りの技術を向上させることを目的としていると言える。

修学旅行に取り入れることを決定した時点では，その効果のほどに関しては未知数であった。しかし，たった１日の活動を終えた後の成果は，これまでのどの教育活動ともちがった効果があることが実感された。まず，生徒の姿としては，各クラスからの"寄せ集め集団"であった40名が固い絆で結ばれた仲間のようになった。その姿を長年本校の修学旅行を扱っているペンションのオーナーは「これまでのどの生徒たちよりも，人の話をよく聞き，仲間と感動を共有しあってい

るように見える」と評した。また，生徒自身も本活動を終えて帰寮する際に心の高揚感が絶頂に達しているという感じを言動に表しており，最終日に他コースの生徒にそのときの様子を自慢げに話していたのが思い出される。

(3) ＰＡとエンカウンター

(2)で言及したＰＡは，高度なフィールド･アスレチック施設のような場所で繰り広げられる，心と体を使ったプログラムである。その活動内容を見れば，おそらく最終的には「エンカウンター」の考え方に基づいていることが実感できるはずである。

プロジェクト・アドベンチャー・ジャパンのパンフレットによれば，このプログラムは次のような手法と予想される効果に基づいて行われている。

① 手法

ア フルバリュー・コントラクト Full-value Contract

人にはそれぞれ別の能力があり，その程度も人によって異なっている。そこで，それぞれの能力に応じて全力でやった事を高く評価するということをメンバーに約束してもらう。そこでは，たとえ失敗してもそれが自信の喪失につながらずに再挑戦するエネルギーが生まれる。

イ ゴール設定 Goal Setting

目標を設定することにより参加意欲を高めることができ，より積極的な行動が期待できる。

ウ デブリーフィング Debriefing

１つのプログラムが終わったときに，トレーナーが参加者に自分について感じたことや，他のメンバーについて感じたことを，常に言葉で引き出すようにすることを指す。これによって，参加者は自分を認識するための情報のフィードバックが得られ，より明確に自己を確認し，また自信を持つことができるようになる。

エ チャレンジ・バイ・チョイス Challenge by Choice

かなりハードなエレメントが用意されているが，それに対する挑戦はあくまで自由意志を尊重する。強制されてやるのではなく，自分を高めようとする意志に基づいた行動が重要である。

② 効果

ア 自信を高める

自分たちの本当の能力の限界は，自分たちが考えているようなレベルのものではなく，もっともっと高いものであるということを理解できる。

イ グループ内の協力関係を高める

すべての活動が他のメンバーの協力がないと行えないものが中心となっている。他のメンバーと協力しながら挑戦することで，他者の「まなざし」に触れることができ，精神的な健康を育てる上でたいへん効果的である。

ウ 自分自信の中に，また他人と一緒にいることに楽しさを見つける

それまで気がつかなかった自分の可能性や他の者と関わることでしかできない楽しみに気づくことができる。

(4)　望ましい学級作りへの応用の期待

修学旅行でＰＡを経験した生徒は，なぜそれほどまでに変容したのであろうか？その理由は，まさに(3)②で述べられている効果が表れたからであろう。すなわち，自分の想像を超える達成感を味わえたこと，他との関わりという点でそれまでの実生活では経験したことがないほど強力な一体感を味わえたこと，その中で自分という存在をどのように生かしたらいいかということを実感できたこと，などではないかと思われる。

わずか１日（正確には約６時間）の活動で，それまでの生活では学級というほど密接な関係をもってこなかった生徒たちが，ある意味では既存の学級以上に良好な集団に成長してしまった。そのような光景を目の当たりすると，これを「学級」という集団を新たに組織する際にも応用できるのではないかと感じたのは，至極当然のことと言えるだろう。確かに，今回の経験は修学旅行という非日常的な条件下の中でのできごとであるので，それがそのまま通常の学校生活に適用できるとはかぎらない。しかし，少なくともエンカウンターの考え方の根底にある良好な人間関係を築き上げるという場を，生徒の実態にあった形で提供するようにすれば，学校生活において最も基本的な生活集団である「学級」をより良い集団へと成長させられるのではないかと考えたのである。この点については，ある教育相談の専門家も，望ましい学級経営の方法の１として「学級開きなどに，構成的グループエンカウンターを取り入れたり，ソーシャルスキル教育を適時に導入すること」（相馬，2000）の効果を述べているので，学級経営に応用することへの期待はいやがおうにも高まった。

３．レクレーション活動「学級自治会」の実践

(1)　実践の動機

本年度，２年ぶりに担任をしている１年５組の生徒は，もともとかなり性格的に素直で前向きな者が集まっているようである。担任の初期指導も素直に受け入れ，気持ちのよい中学校生活をスタートできた。入学して２週間後にとった学級に対する満足度調査でも，平均して88.3点という高得点を記録した（資料１参照）。無記名の自由記述にもクラスの雰囲気に対してほとんどの生徒が満足感を表していた。しかし，その中に２名だけが異口同音に「でも，何か足りないような感じが･･･」と記していたことがひっかかった。それはいったい何か？担任の″第６感″はそれを「求心力がないこと」と分析した。すなわち，それまで多くのことが担任主導で行われていたので，生徒自身が発案して集団を動かしていくということができていないと感じたのである。はたしてその予想は的中した。５月に行われた校外活動では，雨天による避難場所で他クラスが主体的にレクを運営していたのに対して，５組は個人的には優秀な学級委員をそろえながらもそれができなかった。誰も声を掛け合うことができず，他クラスの様子を気にしながらもバラバラなままであった。

この状況に対して，かつて修学旅行で強烈な印象をもったＰＡが脳裏をよぎった。「今こそ自分のクラスであれを実践するときである。」こうして５月21日の学級自治会をテーマにしたＨＲＨの時間は，「レクレーション活動『学級自治会』」となった。筆者がＰＡで感じ取ったことのみをもとに，指導理論の根幹はＰＡのそれを踏襲しつつ，指導方法はまったくの自己流で行うエンカウンター活動の実践を試みた。

(2) 実施計画

① 日　　時　　平成13年５月21日(月)　第１校時

② 場　　所　　育鳳館（講堂）

③ 対象生徒　　１年５組　41名（男子20名，女子21名）

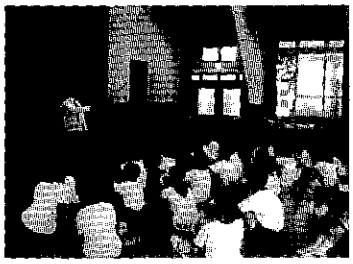
④ 事前指導　　活動の目的・内容は伏せたままタイトルだけを示し，体操着に着替えて育鳳館に集合することだけを指示した。

⑤ 指導過程

過程	指　導　内　容	指導上の留意点
導入	1　あいさつ 2　本時の主旨説明 3　ウォームアップ（プレ活動） (1) 活動内容の説明 (2) 活動実施 4　活動の導入 (1) 活動内容の説明 ・相手と手と足を合わせる ・そのまま一斉に立ち上がる (2) ペア作り（座席の隣り同士）	・楽しそうな雰囲気を作る ・本来の目的を悟られないで，意欲を喚起するように説明する ・楽しそうな雰囲気を作る ・スピード感のある運営をする ・要点のみを簡潔に説明する ・ジェスチャーまたは生徒を使って視覚的な情報を与える ・異性を極端に意識しないように配慮する
展開	5　活動の実践 (1) ２人組による活動 (2) ４人組による活動 ① グループ作り ② 活動実施 (3) ８人組による活動 ① グループ作り ② 活動実施 (4) 20人組による活動 ① グループ作り ② 活動実施 (5) 全員による活動 ① 集団作り ② 活動実施	※以下は(1)～(5)まで共通 ・成功した組を称える。失敗した組にはその原因を話し合うよう指導する→教師が提案をしてはいけない ・グループ作りは指示だけを出し，実際に誰と組むかは生徒に任せる ・適宜ルールの基本を確認する ※４(１)を確認する ・(4)以降は全員がつながっていることを電流の流れの要領で確認する
整理	6　活動のまとめ (1) 感想発表 (2) 指導者講評	 ・達成感を共有させる ・本時の活動の真の目的を説明する

(3)　活動の実際

①　プレ活動



ここでは，その後の活動をリラックスした雰囲気で行えるようなプレ活動を行った。教室と同じ位置に座り，各列ごとに何かを順番に素早く手渡すゲームである。そのときの指示は「自分がみんなに呼んでほしいニックネームを言うこと」であった。これもＰＡで実際に行われていたことであったが，この指示の意味するところは，自分がその集団の中でもっとも居心地のよい環境が何であるかをきちんとアピールすることであると思われる。活動の様子は，その後の活動における高揚感とはほど遠かったが，それでも２回の活動とも生徒は楽しそうに活動していた。

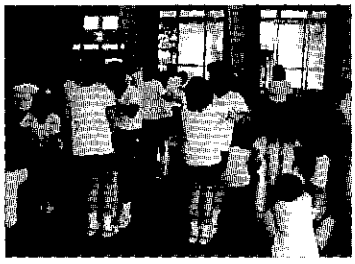
②　活動の導入

本活動の内容は実に単純である。「相手と手をつないで座り，足先をたがいに密着させたままの姿勢で同時に立つ」というものである。ジェスチャーをまじえて教師自身がその形を説明して，座席順に座ったままの隣の生徒とペアを組ませた。一般の公立中学校では，異性に対する過剰な意識から，男女ペアで手をつながせる活動がうまくできないということをよく聞くが，ここでは２，３組において若干の躊躇が見られたほかは，極度の緊張感もなく手をつないで準備態勢に入ることができた。

＜注　意＞

この活動で教師がもっとも気を付けなければならないのは，教師は活動内容を説明するだけで，指導をしてはならないということである。実際のＰＡでもそれは徹底されていた。指導者は，活動の内容を説明することと話し合いのきっかけを作ることだけに徹しており，教師に対しても「先生が何か言うとすべてぶちこわしですから，黙っていてください。」と何度も念を押していた。

③　いよいよ活動開始！



全ペアが準備を整えたところで，「スタート！」のかけ声をかける。何の困難もなく完遂して歓声を上げるペア，一度失敗してからやり直して成功したペア，仲間の成功を横目で見ながら何度目かの挑戦でようやくできたペアなど様々であったが，１～２分の間にはすべてのペアが第一関門を突破できた。

④　最初の応用

次の活動内容は，「これと同じことを４人でやる」というものである。その際の指示は，「現在のペアを生かし，他のペアと４人組を作る」ということだけである。生徒はここで初めて２人の意志を確認し合いながら相手ペアを捜す行動に出る。しかし，ペア活動をすんなりと達成できた生徒にとっては相手を捜すのはたやすいことであった。あっという間に次の活動の準備ができた。

体勢を作らせてみると面白いことに気づいた。それは手のつなぎ方である。条件は２人で行った時と同様であることだけを説明したので，手のつなぎ方には４人組それぞれの個性があった。すなわち，２人組とまったく同じつなぎ方を合わせたグループ，手を互いに交差させてつないだグループ，「はないちもんめ」のように輪を作るようにつないだグループなど様々であった。ここで初めて４人が話し合って自分たちの行動をある一方向に向ける意志を確認し合ったことになる。

開始の合図とともにどのグループも一斉に行動を起こしたが，ペアでの経験が生きていたのか，どのグループもすぐに立ち上がることができた。その時の喜ぶ顔はペアの時よりも数段上であった。

⑤　最初の難関

次のステップは，「４人グループを２つ合わせて８人グループで同じことをやる」である。４人で成功したことが嬉しかったのか，生徒はすぐに８人グループを作って挑戦しようとした。どのグループも４人組で成功した互いの方法を出し合い，その形を作ってすぐに立ち上がろうとした。しかし，多くのグループで問題が生じた。実は，４人組で成功した多くの方法は８人組では通用しなかったのである。特に「はないちもんめ」系の手を外で組むグループは壊滅状態であった。

＜注　意＞

ここでの指導者の指示は，「うまくできなかった理由をみんなで話し合って，よい方法を考えてみなさい。」ということだけである。なぜだめなのかということは決して言ってはならない。生徒から「この方法でいいでしょうか。」と相談されたら，「自分たちがいいと思うのならやってごらんなさい。」と答えるようにする。

各グループとも話し合いに入った。この程度の人数になると，どこのグループにも自分の考えを主張するリーダー格が出てくる。ただし，その他のメンバーにもそれまでの成功経験があるので，彼らもただ黙っているということはなく，自分の考えを言うようになり，にぎやかな会議のようである。さて，話し合いの結果で出てくるアイデアも様々であった。そして，各グループと

もそれを試しに入る。一回で成功して歓声を上げるグループもあれば，同じ方法のまま何度か挑戦して成功するグループ，途中で再度話し合いを行ってちがった方法をとって成功するグループなどがあった。成功した後の様子は，話し合って行った活動が成功しただけあって，どのグループも喜びを共有し合っているという感じであった。

⑥　最大の難関

次の課題は「20人グループで同じことをやる」というものである。作業としては８人の倍の16人の方がやりやすいが，20人という人数にしたのは，最終的に40人全員の活動とするためには，この時点でその半分の数にしてしまう方がいいという判断からであった。

この指示に対して生徒が最初に考えなれければならないことは，20人グループの作り方であった。しかし，８人グループを２つ合わせても20人グループにならないばかりか，少なくとも１つはすでにできているグループを解体する必要が生じるのは，誰の目にも明らかであった。ただし，これまで同様，教師はそのことに対して何も具体案を示さないようにした。結果的には，最初に２大グループができ，そこに一番動きの遅かった残りのグループが分断・吸収される形になった。

２つのグループはさっそく体勢作りに入ったが，ここで手のつなぎ方に関して両グループとも大きなぶつかり合いがあった。それは，それぞれの８人組で成功した方法が異なっていたからである。両グループとも，過去にそれぞれが採用した方法を説明しあい，どちらの方法がいいかの意志統一をする必要に迫られた。最初は両グループとも互いに譲らない緊張した雰囲気であったが，次第に理性的に両者の利点や欠点を指摘する者が現れ，ほどなくして両グループとも意志統一ができた。

しかし，ここで今回の活動中でもっとも大きな困難が待ち受けていた。これはＰＡでも経験していたのであらかじめ予想していたことであったが，実はそれぞれが８人グループで成功した方法では20人という大人数の活動に対処しきれなかったのである。すなわち，８人組ではすべてのグループ員が円形に並ぶ形で課題を解決したが，20人ではこの方法はうまく行きそうにないことがわかった。

＜注　意＞

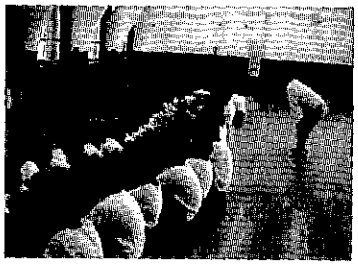
ここで指導者は，「私が言ったのは，相手と手をつないで，つま先を付けて立つということだけです。」ということだけを確認する。並び方を変えたらどうかという「助言」は決してしてはならない。

ここからの動きは両グループで対照的であった。一方は，すぐに誰かが「２列に並んで，向き合ってやってみよう。」と提案してそれを実行しようとした。もう一方は，円陣を組んだまましばらく為すすべも時間を過ごした。新しい方法を考えたグループでは，動き出すとほぼ全員が手

のつなぎ方の議論に参加し，色々なつなぎ方が試された。指導者からは，「ある人に電気を流したら，全員の手を電流が経由して元に戻ってこなければいけない。」という条件を与えた。一人一人が手を交差するようにして迎え側の人と手をつないだこのグループは，結果として１回で立ち上がることに成功した。その間，もう一つのグループでは活発に議論が交わされていた。その時，中から数名の生徒が飛び出し，「こういう風にやってみようよ。」と最初のグループに非常に近い案を実践して見せた。すると残りのメンバーも賛同してそれを実践し，見事に成功させたのである。

⑦　最後の挑戦

いよいよ40人全員で課題にチャレンジすることになった。指示は20人の時と同じである。生徒は自然に20人のグループが２つつながる形を作った。おそらくこれでいけるとふんだからであろう。ただし，手のつなぎ方には両グループで若干のちがいがあったので，最初に一悶着あった。しかし，一方のグループの数名が他方のやり方を支持してそちらでやってみようと提案したので，ほどなく態勢が整った。指導者は，一番端の生徒に「握っている相手の手を握りなさい。握られた人はもう一方の手を握りなさい。」と指示して"電流の流れ"を確認する。こうして準備は整った。後は誰かが号令を掛けるのを待つだけである（教師が掛けてはいけない）。並んだ列のどこからともなく「いくぞ～！」「せいの～！」という声がかかった。最初はそれが全体のものにならず，タイミングが合わない。するとさらに大きな声が出て全員が一気に立ち上がろうとした。ところが一カ所だけ体重差がかなりある部分が崩れた。そこで気を取り直してもう一度挑戦し，見事に成功した。全生徒が歓声を上げ，手を叩いて成功を喜んだ。その姿は全員が気持ちを合わせて何かを成し遂げることの素晴らしさを噛みしめているようであった。それは同時に，指導者にとってはねらっていたことが達成できて胸をなで下ろした瞬間でもあった。



3．考察

今回の活動における成功が，生徒自身の力によるより良い集団作りということにどの程度効果があったかは，実証的見地からは明らかにできてはない。しかし，生徒の中に自分が所属してる集団が一人一人が努力しさえすれば大きなことを成し遂げれる集団であるということを実感させることはできたと考えられる。これは，マズロー（1962）がいう「要求の段層性」の中の「安全の要求・生理的欲求」の上にある「評価の要求・所属の要求」を満たすものであり，最終的な「自己実現」を支えるものとして大きな効果があったと思われる。実際，本活動の一週間後に行った学級満足度調査では，自分の学級に対する満足度がわずかではあるがさらに上昇した（88.5%，資料２参照）。また，その後の学校生活では，学級担任に指示されなくとも，それまで以上に仲間と協力して行動できるようになった。具体的には，行事の前になると学級単位の活動では他のどのくらすよりもよく協力して取り組んだり，終礼（本校の帰りの学活）時に学級の現状における問題点が指摘されると，それを解決するための自主的な"学級自治会"がしばしば開かれたりすることが挙げられる（資料３参照）。４月に学級を編成して９ヶ月が経った現在では，学級担任は生徒の前向きな自主的活動を笑顔で見つめていればよいくらいの段階に入っている。もちろん，この状態はここで紹介したエンカウンター活動だけでできあがったものではないが，この活動が集団におけるより良い人間関係を作るための生徒の主体的行動を起こさせる出発点になったことは確かである。

2002年３月

４　参考文献

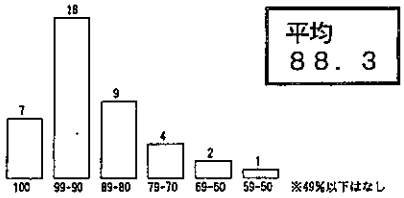
押谷由夫「ふれあう，響きあう友だち関係を育てる」『児童心理』2000年２月号臨時増刊，金子書房
榎本博明「なぜ，友だちづくりが苦手になったのか」『児童心理』2000年２月号臨時増刊，金子書房
片岡徳雄「どんな学級をつくりたいのか－「個を生かす」ために」『児童心理』1993年４月号臨時増刊，金子書房
片野智治他「エンカウンターで学校が変わる＜中学校編＞」Part 1～3，図書文化
國分康孝他「エンカウンターとは何か」図書文化
「エンカウンタースキルアップ」図書文化
「エンカウンターで学校を変える」図書文化
国立岩手山青年の家「野外教育の新たなプログラムの展開」国立岩手山青年の家
小林正幸「ソーシャルスキルをどうやって身につけるか」『児童心理』2000年２月号臨時増刊，金子書房
坂本光男「いまクラスに何が必要か」明治図書
相馬誠一「学級づくりに向けた自己点検「荒れ」を起こさない先生になるためのポイント」『児童心理』2000年４月号臨時増刊，金子書房
館潤二「平成９年度第１学年ＨＲＨのまとめ」『所報』48号，筑波大学附属中学校教育課程研究所
十束文男・宮本裕子「やる気を育てる」文教書院
中嶋洋一「英語のディベート授業30の技」明治図書
畠瀬直子「もっと子どもの話に耳を傾けよう」『児童心理』1993年４月号臨時増刊，金子書房
林伸一他「エンカウンター　ショートエクササイズ集」図書文化
ハントン，マリー「アドベンチャー教育を教室へ－ＡＩＴＣモデルの指導手法－」難波克己訳，プロジェクト・アドベンチャー・ジャパン
福留澄利・園田匠「中学生エージのつかみ方と対応」文教書院
マズロー，A.H.「(出典不明)」，北尾倫彦「子どもの心理と教育」創元社
諸富祥彦他「エンカウンター　こんなときどうする！＜中学校編＞」図書文化

資料１　第１回学級満足度調査の結果（保護者会資料）

１年５組学級懇談会資料　　平成13年5月2日(水)向上会・育風会総会

生徒の学級に対する印象
－4/27実施のアンケート調査結果－

１　あなたの１年５組に対する満足度を０～１００％で答えなさい。また、なぜその点をつけたのか、その理由を答えなさい。



［＋］評価と思われること
① 楽しい … 7
② 明るい … 6
　仲がいい … 6
　先生がいい … 6
③ みんなやさしい … 3
　よい人ばかり … 3
　友だちができた … 3

☆その他
・元気がいい
・まとまりがある
・個性的な人が多い
・外部内部とも仲がいい
・みな親切である
・テンションが高い
・あいさつがいい
・助け合っている
・積極的である
・気軽に声をかけてくれる

［－］評価と思われること
① 授業や終礼のときにうるさい … 13
② よく知らない人がいる … 4
③ けじめがない … 3
④ 注意を聞かない … 2
　何かが欠けている … 2

☆その他
・仲良くしてくれない人がいる
・男子が働かない
・からかう人がいる
・終礼が遅い
・元気すぎて疲れる
・苦手な人がいる

２　１年５組の「よい」と思われる点を３つ挙げなさい。

① 明るい … 22
② 元気がいい … 17
③ あいさつがいい、元気 … 15
④ みんな仲がいい … 14
⑤ 先生がいい（おもしろい、やさしい、さわやか、生徒と仲がいい）… 13

○ 思いやりがある … 5
○ 男女の仲がいい … 5
○ 助け合っている … 4
○ 積極的である … 4
○ 楽しい … 3
○ 発言が多い … 2
○ チームワークがいい … 2
○ 親切である … 2
○ やさしい … 2
・話しやすい
・平和である
・団結力がある
・差別がない
・居心地がよい
・意欲的である
・清潔である
・雰囲気がいい
・内部外部とも仲がいい
・個性的な人が多い
・気の合う人が多い
・性格を改めさせてくれる
・メリハリがある
・笑いの種がつきない
・反省できる
・かっこいい男子が多い

３　１年５組の「改善した方がよい」と思われる点を３つ挙げなさい。

① 授業中や終礼中の私語が多い、うるさい … 36
② けじめがない … 11
③ 休み時間にはしゃぎすぎる（教室内を走る）… 8
④ 行動が遅い … 6
　先生や仲間の話を聞かない … 6
　授業に遅れる（特に体育前後）… 6

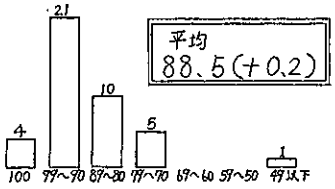
○ チャイム着席ができない … 5
○ やるべきことができない … 5
○ 忘れ物がある … 3
○ 終礼がダラダラと長い … 3
○ 時間が守れない … 3
○ 日直が仕事を忘れる … 3
○ 授業準備をしていない … 2
○ 授業中に口げんかをする … 2
○ 係が仕事を忘れる … 2
○ 反省が生かされない … 2
○ 遅刻が多い … 2
○ 男女のグループが別れている … 2
・移動が遅い
・意見が少ない
・落ち着きがない
・内外部の差別がある
・思いやりがない
・けがが多い
・注意し合えない
・騒ぎすぎている
・変なことをする人がいる
・授業連絡黒板をきちんと利用していない
・元気のよさがうるささになっている
・無強が持続しない
・教室にいることが多い
・勝手に外にいく人がいる
・がまんができない
・あいさつが小さくなった
・ゴミが床に落ちている

◇上記の改善点としてあがったことは、ＨＲＨの「学級自治会」で対策を話し合う予定です。

資料２　第２回学級満足度調査の結果（学級自治会資料）

生徒の学級に対する印象
—6/11 実施のアンケート
調査結果—

Q、あなたの1年5組に対する満足度を0～100%で答えなさい。また、なぜその点をつけたのか、その理由を答えなさい。



〔＋〕評価
① 友好関係が良い
　… 11 (+8)
　明るい…11 (+5)
　元気がいい…11 (+9)
④ 雰囲気が良い…5
⑤ うるさくなくなった…3
　あいさつがよい…3 (+1.2)

〔－〕評価
① 授業や終礼のときにうるさい
　…23 (+10)
② けじめがない…4 (+1)
③ ふざける…2
　友好関係が悪い…2

楽しい…3 (－4)

☆その他
・先生がいい
・やさしい
・助け合っている
・終礼が早くなった
・挙手発言が増えた
・けじめがある
・個性がある
・居心地が良い

☆その他
・気がゆるんでいた
・男子が係の仕事をやらない
・ホールを室内で使う
・集中力がない
・かげ口をいう
・人の話を静かに聞かない

※（　）の中は4/27実施のアンケート調査結果の比較

※集計・プリント作成は学級委員による

資料３　９ヶ月後の学級の様子を保護者に伝える学級通信

1年5組学級通信　1/8/02

ざ・らいと・すたっふ The Right Stuff 第２号

1年5組担任　肥沼則明

第２号が出た！ －ご要望にお応えして－

明けましておめでとうございます！
本年もどうぞよろしくお願いいたします。
さて、前期末に第１号を発行した際に「最初で最後の」という文句をタイトルにつけておいたところ、何人かの保護者の方から「そんなことをおっしゃらないで、次号もお願いします。」というご声援をいただきました。また、記事の内容に関するご感想をいただいたりもしました。やはり、情報をお伝えすることは大切なのですね。そこで、予定外の第２号を発行することにしました。

◎「新たな段階」とは？　－「守」から「破」へ進む生徒たち－

前号では、「１年５組は新たな段階に動きつつあります。」とお伝えしました。その"新たな段階"が明確になってきました。それを一言で言うと、４月の保護者会でもご紹介した千利休の「守・破・離」の話で言えば、「守」から「破」の段階に進んできたということでしょうか。つまり、入学してからすぐは先生や先輩たちの言うことをただ守ってきた子たちが、自分たちの意志で行動をし始めたということです。漢字のイメージからすると、なんだか良いものを壊しているのではないかと思われますが、１年５組の状況は決してそういうものではなく、むしろ「よくもまあ、そこまでやるものだ。こんなクラスは見たことない。」と表現するのが最も適切であると思われるほど、前向きに向上していこうという気運が満ちあふれているのです。具体的な現象は裏面に記しますが、ここでお伝えしたいことを果たして理解していただけるかどうかと思ってしまうほど、その素晴らしい状況に担任は大変満足しています。
もちろん、41人もの人間が集まればトラブルがないということはありません。しかし、そういうことは当然のことと捕え、それをいかに生徒同士の力で解決していくかを援助するのが大切だと考えて指導しています。
今、１年５組は確実に円熟期に入っています。

☆１年５組アラカルト－10月以降の主なできごと－

◇ "あこがれのマドンナ"塩野先生とのお別れ会

後期になって国語科の授業時数が変更することに伴い、それまで週２時間授業を受け持っていただいていた塩野先生が５組を去ることになりました。

塩野先生は５組の生徒に大変人気があった（一部の男子は熱狂的なファンだった）こともあり、全員が大変残念に思いました。そこで、お別れ会を開くことになり、前期終業式直前で先生がいらっしゃる日の終礼にお呼びし、先生からお言葉をいただいた上で、全員のメッセージを入れた色紙を渡して別れを惜しみました。なお、先生は後期は３年生の授業を担当なさっています。

◇全員が力いっぱい歌った「合唱発表会」

12月１日(土)には恒例の「合唱発表会」が文京シビックセンターの大ホールで開かれました。実際に発表をお聞きになられた保護者の方も大勢いらっしゃるのではないかと思います。３年生（特に３年１組）には声量・技術ともに及びませんでしたが、それでも５組の生徒はよくそろった美しい歌声を聞かせてくれました。しかし、本番の発表以上に特筆すべきは練習段階のすばらしさでした。１週間ほど前からは毎日週礼後に全員がそろって練習していましたが、そこまでやっていたのは全校でも５組だけだったようです。みんなよくやりましたね！また、責任者を務めた平良君・小坪さん、君たちの頑張りがあったからこそですよ。ご苦労さん！

◇最高のできだった「研究協議会」公開授業

11月９日(金)には第29回研究協議会が開かれ、英語科だけで全国から120名以上の参会者がありました。５組は午前中に「総合」の新聞・図書館コース（新井先生）の、午後には英語（肥沼）の公開授業がありました。

英語の授業では、教室に入りきれないほどの参観者が見守る中で、全員が終始明るく元気に活動していました。参観者からは生徒の前向きな姿と「話す」力の高さが評判でしたが、私自身としても過去20数回行った公開授業の中で最高のものができたように思っています。

（写真は What Am I? の発表を力いっぱいやってくれた大橋君と岩瀬さん）

エピソードでつづる１年５組の実態②

◇終礼篇　－５組の終礼は長い!?－

「先生、５組はまだ終礼をやってるんですか？」「いやあ、悪いねえ。みんな真面目なもんだからさ。」こんな会話をいったい何度他クラスの人とかわしたことでしょうか。確かに５組の終礼は長く、30分くらいかかることがしばしばあります。しかし、その内容が充実していれば、それは決して無駄な時間ではないと思っています。そして、５組の終礼は担任が思わずうなづいたり、笑ったり（失礼！）してしまうほど充実しているのです。
先日も、ある生徒の発言から、その日の反省の時間がいきなり"学級自治会"になってしまいました。その内容は「授業のはじめとおわりの礼をもっときちんとしよう。」というものでした。それまでの「礼」も、他のクラスには真似ができないほど、近年まれにみるほど素晴らしい礼（「よろしくお願いします！」「ありがとうございました！」付）をしてきたわけですが、「最近はそれが崩れてきている」ということで、どうしたらもっときちんとできるかということが話し合われました。色々なアイデアが出て、最終的には呼吸を合わせるタイミングを変える決議がなされ、練習をしてそろったところで終わりました。と思ったら、E君から「椅子を引くときの音が気になる」ということで、今度は「起立」のかけ声でどのように立ったらいいかという議論になりました。そして、ああでもないこうでもないとさんざん議論がなされて話が混乱してきた時、Yさんが「そんなことより、授業中に私語をしたりすることを解決する方が先決だと思います。」と"鶴の一声"。「オー！」という声と満場の拍手をもって話し合いが終了したというわけです。この話し合いの最中、私はずうっと笑って（失礼！）聞いていました。

◇昼休み篇　－男子は鉄砲玉、女子はマシンガン－

後期になって火曜日と水曜日の５時間目に授業がなくなり、昼休みをゆっくり過ごせるようになったので、両日はできるだけ昼休みに生徒と一緒にいるようにしています。すると、とても面白いことに気づきました。
まずは男子ですが、「ごちそうさま」をすると、ものの２、３分もしないうちにほぼ全員が教室から飛んで出ていってしまい、中庭でバレーボールをしたり、コート面でテニスやバスケットボールをしたり、グラウンドでキャッチボールをしたりしています。これはこの年齢の男子としてはごく当たり前のことで、有り余った（？）エネルギーを上手に発散しているようです。これまでに何度か一緒にキャッチボールをしたり、バレーボールをしたりしましたが、私にとっては「昔取った杵柄」のようで、やる度に後で体中がいたくなってしまいました。「先生、また一緒にやろうね。」という嬉しい誘いに応じられるかどうか‥‥。
次に女子ですが、どうやら体を動かすよりも口を動かすことが好きな生徒が多いようで、特に用事がない限りはほとんど全員が教室でおしゃべりを楽しんでいます。だいたい３、４箇所に分かれて話しているのですが、ときどき前にいる私の所に代わる代わる来ては色々な話をしていきます。マシンガンのごとく繰り出されることばのシャワーにさらされる見返りに(？)、肩をもんでもらったりもしているのですが、いつのまにやら白髪を抜かれたり、「だいたい先生はねえ、‥‥」という攻撃をされたりすることに耐えながら楽しい時間を過ごしています。なんだか娘に遊んでもらっているような‥‥。

◇学級日誌篇

ここでは生徒の目から見た５組の実態を「学級日誌」の感想欄から拾って見てみましょう。

- どの授業も大声で挨拶ができていたのでよかったです。（特に英語）しかし、最近放課後に机に座ったり走り回ったりしている人（教室）が多いので、少し残念に思いました。(10/24)
- ざわついていて、着席とかしずかにして下さいとかいう学級週番の声もきこえないみたいでした。(10/26)
- 「起立」のときにイスを机の中に入れる人が少なくなったところも良いと思います。『今週の目標』をちゃんと実行できるというところに感動です。(11/8)
- 放課後、ボールを使って（教室で）遊んでいる人がいたので、やめた方がいいと思いました。(11/13)
- 合唱発表会の練習をしている時は、みんな本気で頑張っていたので、すごく感動しました！（11/22)
- 授業中うるさかったり、終礼をはじめるのが遅れたり、先生がいないことで皆気がゆるんでいたようです。(11/30)
- もうみんなテストがおわったとたん、もうみんな喜んでしまってうるさくなってしまったけど仕方ないのかな？（12/7)
- おにごっこをしている人たちが机をぐちゃぐちゃにしていってそのまま消えていったのが気になった。(12/18)

年賀状をどうもありがとうございました！

この正月に５組の生徒からたくさん年賀状をもらいましたが、返事を出していません。実は、仕事関係や卒業生などで毎年200枚以上も来るので現役生には出さないことにしています。返事を楽しみにしていた人はごめんなさい。この通信をもってそれに代えさせてください。

☆恒例の「さて問題です。」のコーナー

この学級通信の名前は「ざ・らいと・すたっふ」といいます。英語では The Right Stuff と書きますが、いったいどういう意味があるでしょうか。答えがわかった人は言いに来てください。ちなみに、これは私の大好きな映画（1983年度アメリカ製）のタイトルからとったものです。